



切絵 比企義彦 作

う
ぶ
す
な

茨木神社社報
発行所
茨木神社社務所
茨木市元町4-3
072(622)2346
<http://www.ibarakijinja.or.jp/>

明治二十二年（一八八九年）に市制・町村制が施行されるとともにそれまでの、茨木村・上中条村・下中条村・主原村が合併して島下郡茨木村が誕生しました。市町村の合併が一段落した明治三十九年（一九〇六年）十二月、一町村一社を原則に統廃合を行なうとする「神社合祀令」が公布されました。それにより明治四十一（一九〇八年）旧上中条村の皇太神社、旧下中条村の多賀神社そして旧主原村の主原神社が当神社に合祀されました。

そして平成二十年（二〇〇八年）は、各村の氏神様が当神社に合祀されてから数えて丁度百年目の年にあたります。

旧上中条村の皇太神宮を除いていすれの社殿（覆屋）も旧村から移築されたもので傷みも激しく、今度合祀百年の節目を迎え、天石門別神社御造替を行います。

工事期間は、今年一年間を予定致しております。参拝時何かとご不便をお掛けいたしまがご寛恕下さいますようお願いいたします。

合祀百年記念御造替

いずれの社もその創建は不詳ですが、殊に主原神社の本殿は、大きく周りを極彩色で彩られ、元禄時代の作と伝えられています。ただ経年による絵の具の変色やシミ剥落等で彩色はかなり傷んでおります。天満宮は楠木正成公が、攝津・和泉守護として茨木城を築かれた折に、城の鎮守として祀られたと伝えられており、元和三年（一六一七年）茨木城廢城により当地へ奉遷されました。現在は覆い屋根で隠れて見えませんが、小さいながらも莊厳なお社です。

旧上中条村の皇太神社は、昭和五十九年に御造替されましたが現天満宮の場所へ移築し、天満宮、主原神社、多賀神社、そして東門横の事平神社とをひとつつの覆い屋根で覆う社殿の建造を計画しております。

平成20年1月1日

黒井の清水大茶会

席では、訪れた皆様に艶やかな着物を纏つた茶華道連盟会員の方々によりお茶とお菓子が振るまわれました。一方、境内のテント内では、茨木の銘菓や物産、焼き物等も販売されました。

また、今年は茨木芸術音楽協会の方々による秋にちなんだフルートやピアノの演奏も行われ、野点と相まって、懐かしくのどかな初秋の一日となりました。

ちなみに、この黒井の清水はかの豊臣秀吉公が茨木城に入城した際、茶の湯として使われた井戸の清水をたいそう好まれ、その後黒井の清水と名をうち、大阪城に運ばせたという故事が

去る十月十三日（土）・十四日（日）の両日、今年も当神社の境内にて茨木市観光協会主催の「黒井の清水大茶会」が盛大に催されました。大茶会の開催に先立ち、当日、午前十時より本殿内にて御献茶式が厳かに斎行されました。新宗玲様ご奉仕により、厳肅な中にお茶を二服点てられ、ご神前に供えられました。

あります。「摂津名所図会」(寛政十年・一七九八刊)にも「茨木の社に清水あり、名水にして寒暑増減なし。茨木郷中多く用ひ水とす。」と記されており、茨木に名水ありと古くから愛されてきました。

明治四十四年には当時の皇太子殿下（後の明治天皇）も梅林寺で御仮泊の際には御用水とされました。また、昭和初期まで水を送り、今日の上水道として利用されていました。



となりました。
大阪府でも平成十九年三月
二日に大阪府本部、その後茨
市でも茨木支部が設立され、
木商工会議所及び市内の神社
が中心となり募財活動が開始
されました。

替えられる「式年遷宮」が来る平成二十五年に執り行われます。式年遷宮は、古来、国家の重儀として国費を持って行われてきましたが、昭和二十八年の第五回から、その経費は広く一般からの募財によつて賄われることとなり、今回の第六十二回式年遷宮も財団法人伊勢神宮式年遷宮奉贊会が平成十八年四月に設立され、広く国民の皆様にご奉賛いたしました。

大阪府でも平成十九年三月十二日に大阪府本部、その後茨木市でも茨木支部が設立され、茨木商工会議所及び市内の神社界が中心となり募財活動が開始されました。

神宮への募財は指定寄付金に指定されており税制上の優遇措置を受けることが出来ます。(法人の場合—全額損金に算入 個人の場合—一定の金額を所得控除) 二十年に一度の式年遷宮は、日本の甦りを願う祭でもあり広

伊勢の神宮式年遷宮だより

伊勢神宮式年遷宮奉贊会が設立されました



く皆様のご奉賛が望まれていま
す。募財は当社でも受け付けて
おります。

神さまのおはなし

葦原中原の荒ぶる神々を説得し帰順させるために天照大御神さまは、第三の使者として「また、どの神を遣わせたらよいでしょうか」と仰せられました。思金神さまと諸々の神さまは、「おもいかわのかみ」相談され、建御雷神さまと天鳥船神さまを遣わされました。

こうして二柱の神さまは、出雲国の伊耶佐の小浜に降り、十掬の剣を抜き、逆さまに波頭に立ててその剣の先に胡座を組んで座り葦原中原の大國主神さまに「天照大御神・高木神の命を受けて尋ねにまいりました。あなたが領有する葦原中原は、天照大御神の御子の治める国とおせになられました。それであなたのはどうか」と尋ねられました。これに対し大国主神さまは「私は申し上げることが出来ません。わが子八重言代主神が申し上げるでしよう。しかしへの狩獵・漁をしに御大の前に

行つて、まだ帰つていません」と答えて申しました。

そこで天鳥船神さまを遣わして、八重言代主神さまを召し来て、お尋ねになつたところ、その父の大國主神さまに語られたことには「恐れ多いことです、この国は、天つ神の御子に差し上げましよう」と言つて乗つてきた船を踏んで傾け、天の逆手（普通と逆の拍手の仕方で、呪術的な動作）を打つて青柴垣に変化させて、中に隠れました。

そこで、建御雷神さまは大國主神さまに「今あなたの子、事代主神が、このように申し終わりました。また申すべき子はいますか」と尋ねられました。そこで「また、わが子に建御名方神がいます。これをおいて他にはおりません」と申されている間に、その建御名方神さまが千引の石（千人かかつてやつと引ける程の巨大な岩）を手の先に携えて来て、「誰だ、我が国に来てヒソヒソとものを言つていいるのは。それならば、力くらべをしようじゃないか。まずそちらの御手を取ろうと思う」と言いました。（つづく）

獻
詠

(平成十九年新年の句)

火串会



盛会の臘梅曰和かくはしや
倉垣刀美子

神奈備に雅樂槌音初句会

御降の音なき山を仰ぎをり
岡田 晴江

唐梅はうつむきかげん香ぐはしく
同上 青子

村人は野の仏にも鏡餅

寿ぎに宮の臘梅香をひらく

千支門に迎えられ入浴の会

北川一

社會一門新學科

青松の掛軸新た初謡
倉垣政一

神木の幹にも触れて初詣
田中美佐子 高橋 千雁

初詣どこまで続く人の列 谷本 房子

主宰祝ぐ句座へ寒紅さし集ふ 辻 たかし

火串への未来をつなぐ年迎ふ 寺村 杏子

煩惱を打ち消しきれし除夜の鐘 西山えい子

搖るぎなき歴史重ねて初句会 林 曜子

肩越しに賽銭投げて初詣 藤本 一朗

初詣花鳥諷詠貫かむ 武藤千代子

初暦靈峰富士に始まりし 森脇甲子朗

郷愁の露店を抜けて初詣 八木 徹

願ひごと一つと決めて初詣 安村 昌禧

吾を越す背丈となりし賀客かな 山田 国夫

新春や宮居の杜に鳥の声 山本美佐女

天石門別神社

御鎮座千二百年記念大祭斎行

去る平成十九年九月二十二日
天石門別神社御鎮座千二百年記
念大祭が秋晴れの中、ご来賓の
皆様を始め氏子崇敬者の皆様二
百余名のご参列のもと厳粛に斎
行されました。

当日、天石門別神社前には祭
場の舞台が設けられ、まず宮司
により御鎮座千二百年を祝うと
ともに今日までのご守護への感
謝と今後のご守護を願う祝詞が
奏上され、続いて参列者が玉串
を捧げました。次に茨木神社雅

樂会による神楽「豊采舞」と舞樂
「蘭陵王」が奉納されました。ま
た境内では石門会々員によつて
枕太鼓が打ち鳴らされ奉祝大祭
を盛り立てていただきました。

その後、場所を福祉文化会館

に移して記念式典が催され宮司
より先人達の苦労を偲ぶ話とど
もに、茨木市長様にご祝辞をい
ただきました。また常日頃より
当宮の護持発展のため誠を捧げ
てこられた、茨木恵美須講様・
石門会様・茨木敬神婦人会様に

感謝状を贈呈させていただきま
した。記念大祭斎行にあたりお
忙しい中ご参列また何かとご尽
力賜りました皆様に厚く御礼申
し上げます。

これからのお主な神事

十二月三十一日 越年祭

一月一日 歳旦祭 午前十時

新年を祝い、皇室の弥栄と國
の隆昌、氏子崇敬者の安泰を
祈ります。

一月九日～十一日 十日戎祭

宝恵篭巡行や福籠吉兆を求める
人で賑わいます。

一月十五日

御火焚(どんど)・祈祷木奉焼祭

二月三日 節分祭・鎮魂星祭

厄除祈祷・神楽奉納

鎮魂祈祷(各人のもつて生ま
れた星を祀り、弱くなつた魂
を奮い立たせ活力ある清々し
い魂にかえ災禍を除く神事)

二月十一日 紀元祭

二月十二日 初午祭

四月八日 人形奉焼祭

四月十八日

